

論文の要旨

論文題目 踊る身体の詩学——モデルネの舞踊表象
氏名 山口 庸子
学位 博士（学術）
授与年月日 平成19年6月29日

前世紀転換期から1930年代までのモデルネのドイツ語圏において、なぜ舞踊が、あるべき詩のモデルとなったのか。このような疑問から出発した本論文では、ニーチェ、リルケ、ホーフマンスタール、ヴィグマン、ラスカー＝シューラー、コルマル、ザックスにおける舞踊表象を分析し、モデルネにおいて舞踊が持ちえた、歴史的・社会的・文化的意味を検証した。

本論文の分析対象は、主として文学テキストに現れた舞踊表象である。しかしながら、本論文の主張は、言語と身体、あるいは文学と舞踊を対立させるのではなく、文学以外の各分野も含めた言説と身体的パフォーマンスの相互作用のうちに舞踊表象を捉えたい、という点にある。従ってテキストの読解に際しては、個々の詩人や舞踊家の形成史や作品の内在的理解と、文化史的・身体史的・舞踊史的コンテクストの双方が交錯する地点において、考察を行うように努めた。具体的には、全体性の喪失による「危機」の体感および宗教性や聖性の回帰という時代の精神状況、同時期に誕生したモダンダンスをはじめとする舞踊芸術や身体文化の動向、各種の改革運動の思想と実践の様相、大小の共同体や芸術家コロニーの果たした役割などを常に念頭に置いた。

本論文は、文学研究という視角から、文学と舞踊の関わりを描き出そうとする試みであるが、同時に、クラシック・バレエからモダンダンスへ、あるいはモダンダンスからポスト・モダンダンスへという西洋舞踊史の枠組みを自明視せず、ドイツ語圏のモダンダンスを、思想・芸術・身体文化が絡み合う極めて複雑な一種の社会現象として捉え直す手がかりを提供することを意図している。従って本論文は、文学研究と舞踊史研究の双方に貢献することを目指した学際的な研究という側面を持つ。従来の舞踊史研究、ことに日本の舞踊史研究において言及されることの少ない舞踊家（例：シャルロッテ・バラ）や舞踊史的なトピック（例：ニディ・インペコーフェンへの同時代人の評価）も論文構成上可能なかぎり取り上げており、また映画や写真、絵画などの視覚メディアをも分析に組み込むことで、モデルネの舞踊表象を多角的に把握しうるように工夫した。以下、各章の内容を述べる。

本論文の理論的な枠組みを提示する序章では、モデルネにおける文学と舞踊の接近の背後には、「言語の危機」と「身体言語の再発見」という表裏一体の事態があり、さらにそれは「全体性」の喪失とそれへの憧憬というモデルネの社会状況と関連していることを指摘した。次いで、日常的身体とは「別の身体」である舞踊の身体が、日常世界の変容や世界の再生のメタファーとして了解されていた例を示し、カオス的舞踊・コスモス的舞踊・遊戯、という、世界全体を再創造するような、宇宙論的な舞踊表象のモデルを提示した。また、モデルネの文学における舞踊表象を論じる際にも、舞踊と文学の関係を論じる際にも、男性＝精神／女性＝肉体という 19 世紀市民社会における性別役割を意識化するジェンダー論の視点が不可欠であることを指摘し、さらに、フリーダンスから表現舞踊にいたるドイツ語圏モダンダンスの舞踊史的意義および各種改革運動との関連を論じた。

第 I 部「文学における舞踊表象の類型」の 2 つの章では、文学における宇宙論的な舞踊表象の両極的な例として、ニーチェとリルケを取り上げ、それぞれの舞踊表象の詩学的意味について論じた。まず第 1 章では、ニーチェの言説のモダンダンスの舞踊家・批評家への多義的な影響を例示し、次にニーチェの舞踊表象を、初期のカオス的な舞踊から、中期以降の遊戯の舞踊への移行として跡づけた。ニーチェにとって、舞踊は言葉の^{スタイル}文体であり、認識の方法でもあった。^{スタイル}ニーチェの舞踊表象は、文体論、身体論、認識論、宇宙論など多様な視角から解釈可能であり、身体技法的観点から行われる文化の解釈や、リズムの秩序創出機能への着目など、今なおアクチュアルな着眼が多い。

第 2 章で論じるリルケの場合は、ほぼ一貫してコスモス的な舞踊が現れ、「世界内面空間」に代表されるような、日常世界内の小宇宙の生成と関わる。この空間は主体と客体、外界と内面、個と全体性、日常性と永遠性が出会うような中間領域であり、最初期の『ニーチェへの傍注』から後期の『オルフォイスに捧げるソネット』まで、繰り返し舞踊と結びつけられている。ロイ・フラーらロダン周辺の舞踊家たちの存在、リトミック運動の創始者であるジャック＝ダルクローズへの評価、サハロフ夫妻との関係などの舞踊史的トピックが、テキストの内在的理解とどのように関連するかについても論じた。

第 II 部「文学と舞踊の交点」をなす第 3 章と第 4 章では、モデルネの文学と舞踊の言説において、モダンダンスの身体がどのように捉えられていたのか、またモダンダンスの身体において身体的なものと言語的なのがどのように出会っていたのかを、文学と舞踊という双方の視角から論じた。

第 3 章で取り上げたのは、詩人のホーフマンスタールによる舞踊家セント・デニスについての評論『比類なき踊り子』である。まずホーフマンスタールらドイツ語圏の知識人と、一般にアメリカ合衆国におけるモダンダンスの祖と位置づけられるセント・デニスの相互的な関係を、先行研究や書簡等の記述に基づいて跡づけ、実現されなかった『サロメ』上演プロジェクトについても検討した。彼らの交流は、モデルネの文学や舞踊が、グローバ

ル化されつつあった世界の多彩なネットワークのなかで生きてきたことを示している。次いで、ホーフマンスタールによる、セント・デニスの舞踊の読解を、「言語の危機」の意識と舞踊身体の理想化、舞踊身体の両義性、オリエンタリズムと文化混淆、女性像の変化、という 5 つの観点から分析した。本章でハーン、岡倉天心、ケラーマンなどを挙げて指摘した、モダンダンスへの日本の舞踊（像）の影響という問題は、今後より詳細な研究がなされるべき分野であると考えられる。

第 4 章では、ドイツ表現舞踊のメアリー・ヴィグマンの『生の七つの踊り——舞踊詩』と総合芸術作品『トーテンマール』を軸に、言語と身体に関わりを論じた。またその背景として、ヘレラウやアスコーナを中継地とする改革運動、ヴァイマル時代のダンスブーム、「死の舞踊」という中世的主題の復活、ナチス体制下の舞踊を検討した。『生の七つの踊り』では、女性の主体化および身体と言語の再獲得が主題化されており、一方『トーテンマール』では、言語と身体に共同体の再生に奉仕する役割が与えられる。ヴィグマンの舞踊表象は、カオス的なものからコスモス的なものへという道筋を辿るのだが、ほぼ 1930 年以前までのコスモス的なものが、女性のみユートピア的共同体を意味したのに対し、それ以後は、民族共同体というナショナリズムないしプレ・ファシズム的な意味合いが強まっていく。日本で言及されることの少ないナチス体制下の舞踊に関しては、先行研究が明らかにした宣伝省の書類や書簡等の資料の範囲内で論じているが、表現舞踊とナチスの関係の検討には、擁護か断罪かといった二者択一の論理ではなく、多面的な考察が必要であることは示せたと考えている。

第 III 部「ユダヤ系女性詩人における舞踊表象」に含まれる第 5 章から第 7 章では、エルゼ・ラスカー＝シューラー、ゲルトルート・コルマル、ネリー・ザックスの三人のユダヤ系女性詩人の舞踊表象を、それぞれの作品史を辿りながら分析した。日本におけるドイツ語圏ユダヤ文学の研究には、ハイネ、カフカ、ツェラン研究をはじめかなりの蓄積があるが、女性の作家が正面から論じられる例は少ない。日本において、これらの三詩人をまとめた形で紹介したのは、本論文が最初であり、この点で本論文には、作家・作品研究や舞踊表象の歴史的研究に資するのみならず、日本におけるユダヤ文化研究や女性文学研究への貢献という意義もあると考えている。

第 5 章では、ラスカー＝シューラーの舞踊表象を四つの時期に分けて論じた。その変遷は、ユートピア的な意味でのカオス的舞踊、聖なる書物を構築するコスモス的舞踊、ジェンダーやエスニシティを問題化する脱構築的な遊戯、ファシズムの比喩という否定的な意味でのカオス的舞踊、として辿ることができる。考察の際には、ラスカー＝シューラーと同時代の改革運動や身体文化との関連の歴史的な事実を掘り起こすように努めた。具体的には、ベルリンの「新しい共同体」におけるニーチェ崇拜の影響や画家フィードゥスとの交流、田園都市ヘレラウや田園教育舎運動との関わり、アスコーナ在住の舞踊家シャルロット・バラとの関係などが挙げられる。またラスカー＝シューラーが採用したメディア・

ミックス的な戦略にかんがみ、挿絵や写真がラスカー＝シューラーの詩学に果たした役割にも言及した。

コルマルを論じた第 6 章では、コルマル研究を概観した後、コルマルの舞踊表象に見られる身体とテキストの緊張関係を、美学的および政治学的視点から論じた。コルマルにとって、身体は物理的・象徴的諸力がせめぎあう場であり、舞踊とは歴史上の敗者の側から既存の権力関係をずらしていくような、脱構築的な実践の表象であった。さらにコルマルのエッセイ『ロベスピエールの肖像』の検討から、コルマルが表象と歴史的記憶の問題を、系譜学的手法で考察していることを明らかにし、ファシズム批判という観点から、「蛇の唄」の舞踊表象を解釈した。またマラルメおよびヴァレリーとの比較も行った。

第 7 章では、一般には戦後詩人と位置づけられているネリー・ザックスを取りあげ、その舞踊表象を、モデルネの舞踊表象との連続性と断絶という観点から論じた。第二次大戦以前に調和の表象であった舞踊は、第二次大戦後には、分裂した世界の変身と救済の比喩となる。そこには世界の断片化と統一への憧れという、モデルネの舞踊表象の論理構造が反復されているのだが、ザックスにおいて全体性の表象となるのは、ホロコーストの体験を経たユダヤ民族の共同体であり、舞踊は死や狂気のイメージと結びついていく。舞踊芸術との関連という観点からは、ザックスが傾倒したニディ・インペコーフェン、ニジンスキー、ビルギット・オーケソンらの舞踊家や、第二次大戦を挟んだ「死の舞踊」の意味の変化についても検討した。

最後に、「新しく、根源的な身体——あとがきに代えて」において、18 世紀のクロップシュトックと 20 世紀のザックスを比較しつつ、舞踊が既成の秩序と対立する「より根源的」で、しかも「新しい」ものを体現することを指摘した。そして、ドイツ語圏のみならず日本においても、集団的な舞踊ブームが繰り返し観察されていることから、社会の激動期には、踊る身体によって世界を再解釈しようとする集団的な憧憬が生まれる可能性があることを示唆した。